

やしま



No. 588



Yashima-Town

最終
記念
号

新しい未来へ

伝えて行きたい矢島の歴史



広報で振り返る矢島の歴史

矢島町閉町式・歴史に幕

平成17年3月4日

矢島町116年の歴史に幕

～ 先人への敬意と感謝を胸に、新しい未来へ ～

矢島町閉町式





116年の歴史に幕

そして新しい未来へ

平成17年3月4日(金)、日新館にて『矢島町閉町式』が行われました。当日は関係者130名以上が式に参加し、3月22日をもって合併する矢島町の閉町式に立会いました。

国歌、矢島の歌斉唱の後、佐藤

徳弥助役より合併に至るまでの経緯が報告され多くの協力のもと、今回の合併が成就したことが報告されました。

次に佐藤清圓矢島町長が式辞を述べ、『合併に関しては一抹の寂しさはありますが、町がこれで無くなる訳でもありません。先人の築いた歴史と伝統に感謝と敬意を表し、互いに尊重し、さらに矢島

の良さを伸ばしていける合併になつて欲しい』との言葉がありました。

次に来賓祝辞を述べた、大場重夫矢島町議会議長は「先人先輩方が築き上げてきた文化も、この3月には新しい形になろうとしています。形は変わっても地域住民の幸せを願う思いに変わりはありません。」と話され、閉町に際しての

お言葉を頂きました。

閉会間際に「もう一度矢島の歌をかけて欲しい」とのリクエストもあり、各人が持つ矢島人としての誇りと思いが感じられました。

(写真大・矢島の歌を斉唱する佐藤町長と佐藤助役 写真小右・挨拶をする町長、左祝辞を述べる議長)

本町は、戦後の市町村合併が全国的な流れとして大々的に行われた時も、これに組せず独立独歩の精神を貫きながら町づくりを進めてまいりました。このことは町民等しく誇りとするところであり、町勢を支えてきた根源であると確信いたすものでございます。

しかしながら、平成12年に発令された地方分権一括法以来地方の自立が強く求められるようになりました。さらには三位一体改革に見られるように地方自治体を取り巻く環境はますます厳しさを増してきてまいりました。財政の減少と比例しながら住民サービスも低下するのはどうしても避けなければなりません。幸い、関係各位のご尽力により行財政基盤の強化と効率化を目的とした一市七町による合併協議が今日の結果を迎えることは、愛郷の念が合併への路を切り拓いたものと重ねて感謝を申し上げます。

町長就任以来「自然博物館構想」を基本理念に掲げ、豊かで安心して暮らせる町づくり懸命の努力をいたしてまいりました。おかげさまで社会福祉施設、生活環境施設、産業基盤整備等均衡のとれた事業展開ができたものと考えております。また、佐久市に続いて高松市との友好都市の締結の栄を受けたことも感慨深く、今後さらに強い絆で交流を推進すべきと願っております。

さて、矢島町は、いよいよ3月22日に「人と自然が共生する躍動と創造の都市」を標榜する都市像のもとに由利本荘市になります。いくつもの谷川が集まり雄大な子吉川となり、日本海にそそぐように、一人ひとりが手を取り合い幾多の困難を乗り越え、由利本荘市になつてよかつたとみんなが実感できるまちづくりに努めなければならぬと念願いたしております。

閉町しても私たちの町「矢島」がなくなるわけではありません。それぞれの町の先人が築いた歴史と伝統に感謝と敬意を表し、尊重しあうことが新たな都市の新たな歴史の幕を開き、創る一歩だと考えております。また、そのことが愛してやまないこの町のさらなる飛躍と輝きを増す道と信じております。

立町から閉町までの116年間の歩みを記した広報特集号を編集いたしました。記事はほんの一端にすぎませんが、町民皆様の心の中にある矢島町への想いを大事にさせていただき、限らない発展に一層のご尽力を賜りますようお願いして発刊にあたっての「ごあいさつ」といたします。

国の三位一体改革、市町村合併、変化の激しい今日重要な事の一つは、人間の柔軟性だと思えます。

それぞれの人が自分の利益だけを主張しては、物事は始まりません。柔軟性について、私の大好きな豆腐に例えてみますと、豆腐は四角四面の仏頂面ですが軟らかさが申し分ありません。身を崩さぬだけのしまりもあります。煮ても、焼いてもよし、沸きたぎる油で揚げても、寒天の空に凍らしてもいいです。そして相手を選びません。スキヤキ、鍋物、湯豆腐、冷奴、仏事の皿にも一役買います。実に融通がききます。それは、冷水の中にどつぷりと浸けられたり、熱湯の中をくぐり抜けたら、こまかい袋の目でこされたりして、さんざん苦労しているからだと思えます。グラスを片手に、ネギと生姜をたっぷり入れた冷奴をチビチビとつまむ時万感の思いがたちこめるのです。

もう一つの柔軟性の親分は水です。水は方円の器に従う事はもちろん、豆腐以上に自分の形を変えます。冷やされれば氷と化して鉱石と同じ硬さにもなれます。温められれば液体になり、さらに温度を加えれば、気体として水蒸気にもなれます。もっともっと熱を加えると酸素と分れて水素となります。水素はものすごいエネルギーを出します。

湖水は石を投げても、槍を刺しても爆弾を落とすでも一瞬反応を示しますが、しばらくすると何事もなかつたように静けさをとりもどします。全てのものを包みこんでしまいます。

時代は益々変化が激しくなります。このような時代には、いつも豆腐と水を心の中に置きたいものです。私達は、往々にして自分にこだわってしまいます。自分にこだわることによって鋳物になってしまいます。鋳型にはめこまれた鋳物と豆腐とは大違いです。考え方は力チ力チで視野は狭く、ちよつとした衝撃で簡単に傷がついてしまいます。

そんな風にはなりたくないなと思えば、毎日おいしい豆腐を食べ、水のような物をゴクゴク飲んでいる私であります。

町民に親しまれてきた広報「やしま」も、合併に伴い第588号を以って任務終了となる。長い歲月、その編集に携わった各位に深謝申し上げたい。本当にご苦労さんでした。

この機会に過去の町村合併を顧みると、現在の矢島町は、生駒領の時代、侍の住む家中と、町奉行支配の二町、更に村方の方は前郷九ヶ村（七日町・城内・荒沢・新町・新所・九日町・須郷田・金ヶ沢・小坂戸の各村）と向郷七ヶ村（坂之下・新莊・中山・八ツ杉・木在・川原・杉沢の各村）、つまり二郷十六ヶ村に分かれ、郡奉行支配のもと、各郷に庄屋（大名主）、各村に名主が各々一名いた。

版籍奉還、廃藩置県後の明治6年、大小区制が施行され、秋田県第四六区（由利郡）第三小区七日町村などとなり、初代第四六区長が佐藤政忠、2代目が小助川光敦と共に矢島藩出身であった。

明治十一年に群制が施行され第四六区は由利郡となるが、その直前の明治9年11月に立石村と川辺村が、翌10年2月に元町村が誕生する。矢島町にとっては合併の最初である。

更に設立年月日は定かではないが郡制施行にともない、次の戸長役場が設けられた。1、矢島矢島町ほか四ヶ町村戸長役場 2、七日町村ほか二ヶ村戸長役場 3、立石村ほか三ヶ村戸長役場

明治21年市町村制が公布され、新しい市町村の編成がなされたが、その過程で長年向郷に属してきた坂之下村、新莊村、立石村、木在村や元町村代表は別村設立を強く主張されたが、県・郡からの強い説得に依り、明治22年4月、現在の矢島町が誕生した。

以来、昭和の六合併にあたって、単独立町を決意、時の知事の承認を得て今回の大合併迄、単独矢島町として百十六年の輝かしい歴史を歩み続けて来たのである。

合併により一抹の寂しさはあるが、各地域の特色を生かした施策により、合併してよかったと言う実感を新市民に与えて下さることを願うものである。

この町に生まれて18年。今日、三年間の高校生活を無事に終え、卒業式の余韻も覚めないままこの原稿に向かっています。県外大学を受験した私は、「由利本荘市」が誕生する頃には、故郷を遠く離れた地での新生活の準備に追われていることと思います。

市町村合併の話を初めて聞いたときは、正直衝撃を受けました。父母同様に私を育ててくれたのは、ほかでもないこの町です。十八年間で過ごしたこの町への愛着はとても深いものです。矢島という一つの枠よりもより大きな視野が求められるということに、時代の変化を感じさせられました。大きな市として生まれ変わった後も、私の故郷がこの鳥海山のお膝元、自然に囲まれた矢島町であることに変わりありません。個性ある他の地域と協力し合って、より住みよい地域となってくれることを信じています。

高校生活の三年間は、自宅と学校の往復終始して、豊かな自然にゆつくり目を向けることもなかなかできなかったように思います。故郷を離れる前に、この矢島の風景をしっかりと目に焼き付けておきたいです。小中学生の間通い続けた学びの舎は、変わらず佇んでいるのでしょうか。友達と遊んだ山や川は、矢島の誇りです。懐かしい気持ちで思い出すのは、いつでも美しい矢島の姿です。故郷を離れたらより強くこれを感じることでしよう。

合併に対しては、ほんの少し寂しい気持ちが拭えませんが、私自身の故郷からの巣立ちとは時を同じくして、この矢島が新たな市として生まれ変わる瞬間に立ち会うことができるのを嬉しく思います。そして、次に私が故郷に帰ったときに、新しく生まれた由利本荘市が一体どんな顔をして私を出迎えてくれるのか、とても楽しみにしています。今は、私の故郷・矢島の新たな門出を心からお祝いし、一層の発展を祈りたいと思います。

本荘由利一市七町合併の経緯

○ 矢島町の取り組み

- H13. 8. 30 合併に関する調査プロジェクトチーム設置
各課代表 補佐、係長職員21名
- H14. 2月 } 町広報で合併の仕組みを周知
合併の背景、国県の支援、市町村合併研究会の報告
- H14. 4月 }
H14. 2. 16 市町村合併フォーラム開催 日新館
専修大学教授 小林弘和氏による基調講演 200名参加
議会合併調査特別委員会設置（議員全員委員会）
- H14. 3. 14 知事と語ろう市町村合併トーク 日新館
- H14. 4. 11 町議会議員より秋田県知事に合併に関しての質問及び要望等
- H14. 6. 24 市町村合併地域説明会 各地域会館等28ヶ所
} 矢島町の現状の説明と質問を集約し結果を全戸配付 543名参加
- H14. 7. 5 }
H14. 7. 22 本荘市、矢島町女性団体町村合併交流会
市町村合併に対する意見交換 50名参加

H14. 8. 20 市町村合併に関する意識調査（アンケート）
1,843世帯と抽出1,000人 回答率 78.90%

市町村合併について

- ①積極的に進めるべきである 16.45%
- ②どちらかといえば進めていくことが望ましい 41.02%
- ③進める必要がない 22.69%
- ④どちらでもよい 19.84%

- H14. 8. 23 議会合併調査特別委員会の調査報告書全戸配付
- H14. 9. 17 合併協議会準備会参加への意思決定
- H14. 10. 15 合併説明会 日新館 5区分
} 合併協議会準備会参加までの経緯の説明
- H14. 10. 24 町民の意識調査（アンケート）等 127名参加
- H15. 6. 11 新しいまちづくり懇談会設置
合併協議会委員と公募による合計25人の委員
新市のまちづくりについて意見を交換し新市建設計画への矢島町の要望等を提言する
- H16. 1. 13 合併住民説明会 各地域会館等5ヶ所
} 合併協議会の推移及び新市まちづくり計画
- H16. 1. 20 「基本構想」の説明 162名参加



○本荘、由利1市7町の取り組み

合併協議会設置まで（平成13年度～平成14年度）

- H13. 8. 21 市町村合併共同研究会発足
・本荘由利1市7町の合併担当課長及び職員で組織
・合併のあり方や効果等を調査検討（随時開催）
- H14. 2. 15 市町村合併に関する協議会
・本荘由利1市7町の市長及び議会議長が参集
・同年10月頃を目途に、各市町で法廷合併協議会設置に向け意志決定することを確認
- H14. 10. 28 市町長・議会議長協議会
・合併について本荘由利1市7町の意向を確認、合意
・合併協議準備会設置要綱を決定、同準備会を設置
- H14. 11. 1 秋田県合併重点支援地域に指定（県内2例目）
第1回合併協議準備会
・役員を決定
- H14. 11. 19 第2回合併協議準備会
H14. 12. 1 第3回合併協議準備会
H14. 12. 11 第4回合併協議準備会
H15. 1. 8 第5回合併協議準備会 } 本荘由利広域行政センター内に事務局を設置。
法定合併協議会設置に向けて協議。
- H15. 1. 14 本荘由利1市7町で臨時議会を開催
・合併協議会設置議案、関係予算を議決
- H15. 1. 15 本荘由利一市七町市町長会議。本荘由利一市七町合併協議会設置。

22回にわたる協議の末に

本荘由利一市七町合併協議会設置

合併協議会設置後（平成14年度～平成16年度）

- H15. 1. 21 第1回本荘由利一市七町合併協議会
・合併協議会規約、事務局規程、幹事会等設置要領、平成14年度予算を報告
・会議運営等の規程、合併の方式、目標年次等を確認
- H15. 3. 20 第2回本荘由利一市七町合併協議会
H15. 4. 17 第3回本荘由利一市七町合併協議会
H15. 5. 15 第4回本荘由利一市七町合併協議会
H15. 6. 19 第5回本荘由利一市七町合併協議会
- H15. 7. 10 新市名称の募集
} 本荘由利1市7町在住者を対象
H15. 9. 9 有効応募数5,211件（1,087種類）
- H15. 7. 17 第6回本荘由利一市七町合併協議会
H15. 8. 11 第7回本荘由利一市七町合併協議会
H15. 9. 25 第8回本荘由利一市七町合併協議会
H15. 10. 27 第9回本荘由利一市七町合併協議会
H15. 11. 30 第10回本荘由利一市七町合併協議会
H15. 12. 18 第11回本荘由利一市七町合併協議会
H16. 1. 8 第12回本荘由利一市七町合併協議会
H16. 1. 22 第13回本荘由利一市七町合併協議会
H16. 2. 26 第14回本荘由利一市七町合併協議会
H16. 3. 18 第15回本荘由利一市七町合併協議会
H16. 4. 23 第16回本荘由利一市七町合併協議会
H16. 5. 21 第17回本荘由利一市七町合併協議会
H16. 6. 16 第18回本荘由利一市七町合併協議会
H16. 8. 2 第19回本荘由利一市七町合併協議会
H16. 8. 17 合併協定調印式
- H16. 8. 17 新市の市章デザイン募集
} 全国募集 応募作品点数 2,262点
- H16. 8. 18 本荘由利1市7町で臨時議会を開催
合併関連5議案を議決
- H16. 8. 23 県知事に「廃置分合申請」を行う
H16. 10. 5 廃置分合処分の決定 決定者が県知事より交付
H16. 10. 19 第20回本荘由利一市七町合併協議会
・地域審議会及び地域自治区について（中間報告）
・新市の組織、機構について確認
・特別職の報酬等に係わる小委員会の設置について
- H16. 10. 28 市町の廃置分合、総務大臣告示（官報）
H16. 12. 6 「由利本荘市誕生に向けて」住民説明会 日新館
H16. 12. 23 第21回本荘由利一市七町合併協議会
・平成16年度補正予算を報告
・由利本荘市市章の報告
・地域審議会及び地域自治区の取扱について確認
・特別職の報酬等の取扱について確認
- H17. 2. 27 第22回本荘由利一市七町合併協議会
・平成16年度中間監査の報告
・新市の組織機構の変更報告
・由利本荘市長職務執行者の選任報告
・本荘由利一市七町合併協議会の廃止について



合併協定書に調印する佐藤町長



合併協議会の様子

● 矢島町議会事始(町制施行)

(明治22年4月)

明治22年4月22日、18名の初代議員によって議会が開催され矢島町の誕生となる。
初議会では議員の投票により、初代町長 小助川光弘が当選の栄誉をになう。以来116年、現町長の佐藤清圓は11代目となる。
開庁時の当時は三役のほか5名の職員であった。



(行發店高利社)

長全場役 (島矢鎮町)

● 乾田稲作の普及

(明治22年4月)

明治24年以降はこれまでの水田から乾田耕作への試みが実施された。米質の改良・多収穫ははもとより、人耕から畜耕に転換する本町農耕史上の揺籃といえる。やがて時を重ねた昭和17年には、川辺沢内に矢島町第1号の耕運機が導入され、畜耕から機械化へと発達した。



● 小学校新築

(明治22年4月)

大正年5月15日、本校火災に遭い校舎・校具等全焼す。大正9年、新校舎の落成、現在の校歌も作詞 土田誠一 作曲 斎藤佳三により制定される。

明治、大正、昭和、平成とその時々の教育方針に基づく教育によって16、802名の卒業生を輩出している。



(矢島町立小学校新築) 日一四一八八八

116年の第一歩始まる

● 前杉(国道108号)の新道開設

明治14年、県道に認定された前杉地区の旧道は、現在の大館字を通る出入り口とも急峻で馬車の往来も障害する矢島街道の難所といわれた。秋田県への現道改修陳情から10数年後によりやく事業採択の確約があった。しかも旧道改修ではなく現在の子吉川沿いを走るルート変更による新設だった。工事は堅い岩質のため難儀を極め、様々な犠牲の中で明治43年完成した。

(明治14年4月)

● 国鉄矢島線の開通

昭和13年、本史の中で欠かすことのできない矢島線が開通する。その後に住民にもたらした、経済的、文化的あらゆる面での恩恵は計り知れないものがある。

(昭和13年4月)



当時の街道、今とかなり印象が違う



現在の様子



● 祓川ヒュツテ建設

(昭和26年4月)

昭和26年、祓川に2階建て70人収容のヒュツテが完成する。管理人の佐藤康氏は全国の岳人に慕われ、今もその名を8合目のケルンに残す。

● 矢島町自動車第1号

(昭和7年)

大正7年、酒田市の三丁目徳次郎氏が矢島本荘間の定時乗合自動車を運行する。



町政ちびり(広報誌副刊)

(昭和26年第1号より)

・54年前)

『断片的。部分的。形式的記載に終始する「町政だより」は町民各位に対し頗る忠実を欠くくらいがあり私としては甚だ不本意とするところでず。然し昨今の町政の目まぐるしさは、到底総括的、全体的、内容的に充実したものの記載と言うことはなかなかの難事業のようである。』

そうかといって非常に変遷極まりない時局の推移に処する町政の運行を一片の通知でお知らせすることもこれ以上の不親切のようにも思われ、町議会と協議して取り敢えず発行することにしたわけです。

小紙乍らせめて長い「時」をかりて町政に御理解をいただけることを念願して。』

当時は情報を開示することが難しい時代だったと思われる。

高松宮家礼状

(昭和29年第17号より)

『高松宮殿下には五日朝無事御帰京に相成りました。』

今回の殿下の鳥海スキー御登山は全くあわただしい後日程で若し三日という日が荒天にでも禍されると無意味に近いものなることを心配いたしました。ところが皆様の赤誠天に通じた為か二日も、三日も、四日も稀に見る晴天が続き、鳥海の偉容をいつも仰ぐことのできましたことは誠に幸いで御座いました。おかげをもつて、一八五〇米の高さまでお登りになることが出来、充分にスキーをお楽しみいただくことが出来て、三日間とも殿下には、終始御機嫌うるわしく拜し得ましたことは有難くもうれしいことで御座います。これは晴天に恵まれたことと各方面の皆様が周到な御準備と御熟誠によるもので、ここに宮家事務官を代理し謹んで御礼申し上げます。又、私は家内をもつれてお供いたしましたので、大変御世話になってしまいました。

謹んで御礼申し上げますと共に、美しい鳥海の姿と楽しかったスキー、それにいただきました皆様の御親切は一生忘れ得ない貴重なものであったことを申し添え御挨拶といたします。

東京都文京区駒込神明町 小川勝次
初めての宮様の来町、さぞかし大変だったでしょう。

小学校で試験的に牛乳給食

(昭和34年第43号より)

『小学校では二十八日より試験的に牛乳給食を実施することになった。給食は(中略)秋田県は全国的にみて実施率が低くそのうちでも由利郡は最も低い。今度行われる給食用の牛乳は一本七円で農林省が四円を補助し残りの三円が児童負担となっている。実施日の今日、教室はあまり急いで吞んでむせかえっている児童もありません。』

初めての給食。子供たちにとってはいろんな味がしたでしょうね！

栄町の火災について

(昭和30年第25号より)

『五月十五日午後九時に発生した栄町の火災に当り、全町消防団の必死の活動、鳥海村、由利村、本荘市各消防団並びに町民各位の応援にもかかわらず、栄町目抜き場所三十一世帯を焼失した、本町希有の災害は遺憾此の上もなく誠に申訳無い次第である。』

町においては早速翌十六日緊急町議会を招集し、救援対策に付審議し、同日午後町長、議長、議会常任各副委員長出席し罹災救援について小畑知事始め関係各部課長に陳情した。中略

罹災者一同も一時は悲観にくれ、手の施し様も無い様子であったが、皆様の厚い激励と援助に依り力強く復興に立ち上がっている。

ここに紙面を通じ各位に深甚の謝意を表する次第である。』
矢島町となつてから最大の災害。この教訓によりその後、大火は発生していない。

● 矢島時間の汚名を返上しよう！

● 鳥海山、国定公園に

(昭和38年8月号より)

(昭和33年第37号より)

『矢島時間！なんといういやな言葉でしょうか。矢島時間とは、定刻より一時間また一時間半位おくれる時間のことを言うようではないのでしようか。』

何々会議、午前何時、との通知が届けば、誰でもその時間を頭に入れ、その時間に出席する気になることと思いますが、その時間になると、どうしたものか時間通りに家を出ることを遠慮するようです。会場は定刻までに整備し、出席を待つておる訳ですが、定刻に出席する方もまだまだ珍しい位です。

何の会議の会場でも出席者の「本当に來ない」「困ったものだ」などの声を聞くが、規則規定の会議等はその定員出席まで二時間でも三時間でも忙しい時間を煙草と雑談にすぎし、一番大事な会議は残時間ぎりぎりの時間で会議することも数多いようです。規則のない会議であれば出席者のみで会議を開会するが、開会後にはポツリ

ポツリと出席者がふえ、全員そろうころは、会議も八、九分通り終了し、その都度主催者又は係は経過の説明を必要となり、その時間の無駄も大変なものであり、主催者、係員の気苦労もお察し願いたいものです。

「なに、矢島時間だもの」「自分が出席しなくとも」と言ってしまうえばそれまでですが、どうにかしてこのような気持ちを一扫し、明るい会議の実現を望みたいものです。これはどうしても一人一人の努力であり、口をそろえて時間助行を叫んでも簡単には守れそうにもありません。せつかく会場に来て空席を見て帰る人、出席すべく準備し自宅で足ぶみしている人、電話の來るのを待つている人、これでは絶対に時間助行は出來ないと思います。定刻に主席し、会場の空席を見て自分の時間助行を誇りと考えてくれれば幸いです。が、ともすると時間助行を馬鹿らしく考えるのも無理とは言えないようです。

さて、主催者としても定刻通りに開会するとすれば、前記のよう

に説明などで完全なる会議も出來ず、せつかく出席した方々には何の意味もない会議になるスピード会議で解散するようになってしまいう例も少なくない。

通知に、開会時間を書く以上、閉会時間も書いたら時間を守るとの意見もあります。これは時間厳守以外の何の効果もないものでしょうか。時間の大切なることは今更申すまでもありません。が、お互いに矢島時間の解消にため時間を守り、明るい楽しい矢島町となるように致しましょう。』

当時は矢島時間が普通だったのでしょう。いつの時代も時間厳守は大切な約束事です。

『鳥海山、国定公園に昇格確定 詩情ゆたかな自然の美観 若さあふれる大雪渓は招く』

自然公園審議会は、さきに厚生大臣より諮問されていた国定公園の指定について、鳥海山外三ヶ所を国定公園に指定するよう答申したので県立公園から昇格が確定しました。

指定されて範囲は秋田県側は矢島町、鳥海村、仁賀保町、象潟町にまたがる一円と山形県側は酒田市、遊佐町、八幡町と飛鳥までが含まれ、鳥海国定公園の名称になり、自然公園として施設され保護されることになりました。

山形県と共に、もうれつな運動を続けてから三年にして実を結んだわけですが、県立公園の指定運動以来、実に十年の歳月を経て今日に至った感慨は一入深いものがあります。』

指定まで長い時間がかかりましたが、そのおかげで鳥海山の自然が残ることができました。



40年たち今度は
総合支所となります

自動式電話が開通！

(昭和41年8月号より)

『東京も隣り。社会が複雑化するにつれてお互いの日常は益々忙しくなっており、時間の空費は深刻な問題となっており、通信機の果たず役割は日を追うて重要度を加えて来ました。自動即時通話ができるようにハンドル式からダイヤル式へ、料金も定額制から度数制に変更。』



今や町は全国でも
先進のITの町

新役場庁舎が完成

(昭和41年1月号より)

『新潟地震で被害にあった役場庁舎は、昭和40年12月25日に完成し、県内にも見られない程立派な町民の庁舎が出来上がりました。』

NHK矢島テレビ放送局が開局



ハイビジョン登場のはるか前

(昭和41年11月号より)

『鳥海町栗沢に建設されていた無人放送局が完成し、昭和41年10月15日より矢島テレビジョン放送局として開局されました。この放送局ができたことにより矢島町及び鳥海村の難視聴も解消されました。』

例を見ない水害と記録的な豪雪！

(42年11月、50年8月水害、49年2月豪雪)



(昭和42年11月号より)

『8日夜から降り出した雨は、木境及び荒沢川上流地区に集中豪雨となり、昭和42年11月9日午前1時半頃より荒沢川は、急激に増水、堤防から溢れた濁流は栄町一帯を襲い、またたく間に108世帯(床上17、床下91)に浸水93世帯362人の被災者を出した外、製材工場、建設資材、農業倉庫の抛出米、商品など多大の被害を受けた。』

(昭和49年2月号より)

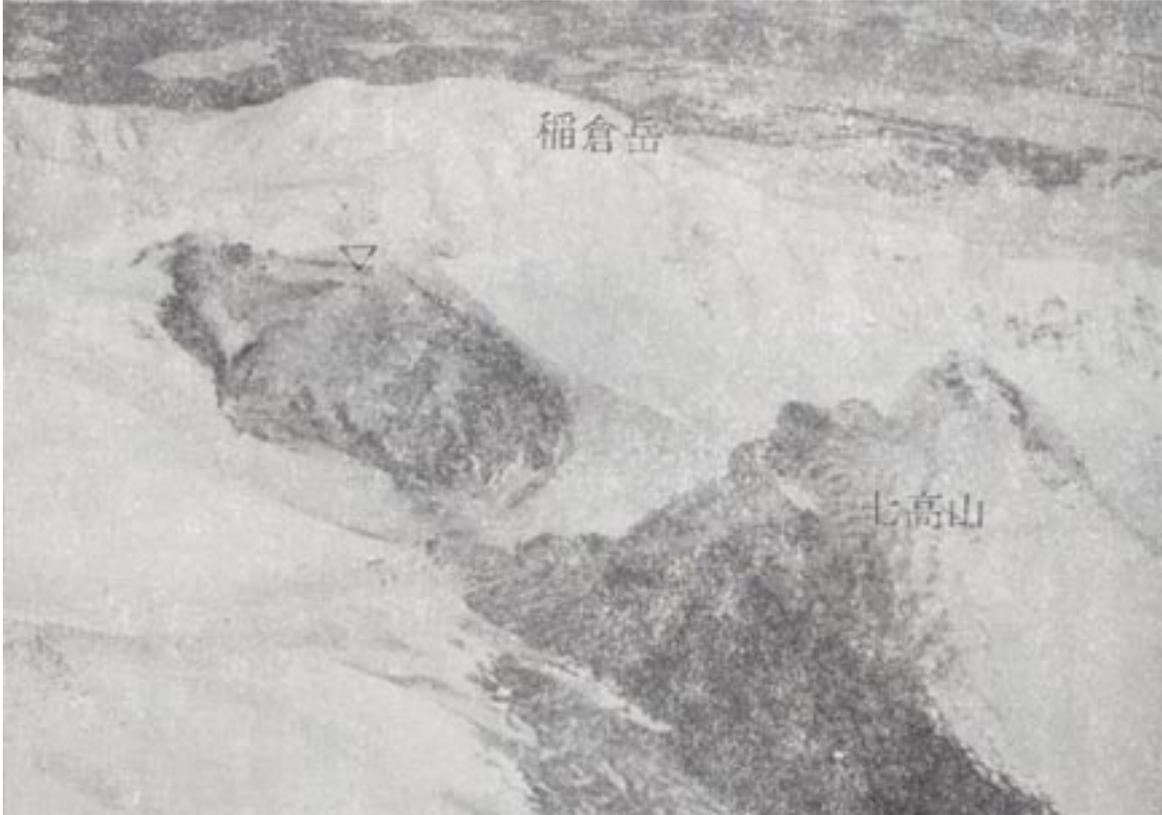
『昭和48年11月17日より降り始めた雪は、断続的に降り続き、2月2日の50cmの降雪をはじめとして1日に30cm以上の降雪日は4日記録。積雪量も2月14日には、2m75cmを記録。あまりの雪の多さに「雪おろし」ならず「雪あげ」に連日追われる状況となった。』
平成17年もこの年に続く豪雪となった。

(昭和50年8月号より)

『8月5日に発生した雷雨により、子吉川が氾濫し流域の堤防が決壊、田畑の流失埋没冠水の被害がでた。栄町住宅を中心とした床上浸水や川辺地区を襲った鉄砲水は一瞬のうちに堰を破壊し、流れ出た土石は道路を埋めて、住家の中まで侵入した。被害額は、町予算1年分に相当(11億3000万円)』

● 噴煙を上げた鳥海山！噴火対策本部を設置

● ジーシー牛5頭を海外導入



噴煙を上げる鳥海山は町民に衝撃を与えた

(昭和49年3月号より)

『昭和49年3月1日、全日空定期便の高田機長が「鳥海山から煙らしいものが上がっているのを見た。」ということがテレビで報道され、半信半疑、空を眺めること数時間、午後4時過ぎ、雲があがり、噴煙が町民に確認された。しかもが予想しなかった鳥海山が噴煙活動を始めました。』
町民だれしもが経験したことのない、153年ぶりの噴火は今もなお心に残っています。



(昭和53年9月号より)



『昭和53年8月10日、ニュージーランドより輸入したジーシー牛5頭が無事到着しました。34年にオーストラリアより119頭、翌35年に92頭、計211頭の海外導入により始まった本町のジーシー酪農は、飼育頭数にして39年に400頭を超え、現在483頭、飼育農家数45戸となり平均頭数が10頭台になりました。今期に20年来の海外導入という活気を踏まえて本町ジーシー酪農の今後の発展に結びつくものと期待されます。』

文集・寄宿舎生活から

(昭和54年1月号より)

『文集 寄宿舎生活から』

中学校3年 村上美喜子

師走の声を聞くと矢島中学校の寄宿舎生活が始まる。今年も寄宿舎では二十七人の男女生徒が親元を離れ生活している。起床六時半から就寝九時まで規律ある団体生活で張りのある毎日を送っている。次の作文は生徒たちが寄宿舎生活の感想を町長宛に寄せられたものです。それぞれ真剣な生活態度が感じられます。

今、私たちが寄宿舎入舎して、とても住みよくくらししているのは、みんな町のおかげだと思います。

寄宿舎に納めるお金は、もつとたくさん納めなければならないけれど、ほんのおやつ代しか納めなくてもよいし、ほんとうに、どうもありがとうございます。

これからもみんな仲よく助け合い、先生にもめいわくをかけないようにし、なるべく私たちの手で力を合わせ、よい寄宿舎にしていきたいと思えます。

私たち三年生は、これから受験勉強のおいこみになるので、そんなとき寄宿舎は近いし、同じ三年生がたくさんいるから競争心もはげしくなる。時々とまりに来る先生にわからない所を聞いたり、友だちに聞いたりできるのでそんな学習の面で便利である。また、寄宿舎の生活は団体生活なので、自分勝手なわがままな行動はできないので、生活の面でもよくなると思う。

私たちが卒業するときには寄宿舎に入った人たちは、とてもよかったですみんなから思われるようにがんばります。』

寄宿舎は昭和43年に中学校で(利用生徒55人)同47年に小学校(同58人)で開始され同63年冬まで続いた。

出稼ぎ先訪問

(昭和54年4月号より)

『三月十二日より十七日まで六日間の日程で出稼ぎ先を農協との合同で訪問してきましたのでその概況をお知らせします。』

愛知県知多市外十事業所の訪問でしたが、約百名近い矢島の皆さんに逢い、それぞれ元気に働いておりました。特にどの事業所でも、宿舎、健康管理には気をつけており、この面では安心してまいりました。』

この年の出稼ぎ者は334名。昭和51年は387名。冬期になると関東・東海地方を中心に多くの出稼ぎ者があった。

「善政は善教にしかず」小畑前知事来町

(昭和54年7月号より)

『私は二二歳の時に村役場に入り(中略)この五二年の公的生涯を顧みて、尊い経験を つんだのは何と云っても青春時代を過ごした役場書記時代である。住民の幸せのために働く、町の発展のために働くという、こんな崇高なそしてやりがいのある仕事はないと思っている。自分の仕事に誇りを持って頑張っていたきたい。矢島町は自然環境にも町民性においても全県でもっともすぐれた宝をたくさん持っている。まだまだ、無限の可能性を秘めているから矢島町のために一生懸命頑張っていたきたい。』

県知事として二四年間、地方自治につくされた小畑元知事が、この年、六月四日、来町し職員の前で講演した。

矢島のうまい米

ササニシキ!

ヒマラヤへ

(昭和54年5月号より)



『ネパール・ヒマラヤ・ダウラギリ縦走登山隊の主食糧として「矢島のうまい米、ササニシキ」二十俵（二俵六十キロ）が遠くネパールはヒマラヤの地へ運ばれることになった。

この輸送は、去る三月三十日に農協倉庫からトラックへ積出され一路登山隊の荷物こん包場所、埼玉県所沢市の所沢小学校へ運搬されました。（中略）隊長は、女性登山家として知られる高橋通子（旧姓今井）さん（医師）以下一六名のメンバーが隊員。（中略）

この登山計画の中に「矢島のササニシキ」という話がでたのは、荒沢の佐藤清円さんが、国際ロータリー第二五四地区の皆さんとネパールの農業開発に民間サイドから協力しようということとネパールに渡ったときに、ヒマラヤ観光の宮原社長と会った際に話題になったのがきっかけです。

（中略）佐藤清円さんは帰国後、早速町の関係者へ打診したところ、農協では「地場米が知られる好機」と快諾。（中略）

このようにして「矢島のササニシキ」が海を渡り遠くネパールの巨峰縦走岳人のエネルギー源として、一つづつ、一つづつの米が生かされたのであります。』



雪国の新兵器「流雪溝」始動!

(昭和56年1月号より)

この年の十二月十八日、流雪溝の第一号となる新町、大川原流雪溝が始動し、無雪都市をめざし画期的な第一歩を踏み出した。

現在、流雪溝は延長約22kmで完成し除排雪の重要な手段となっている。



冬の強い味方!!



町民歌「矢島のうた」編曲完成

(昭和55年9月号より)

この年、「矢島のうた」が本町出身の山田善一郎先生により編曲され、新しい楽譜が町長に手交された。

土田誠一作詞、斎藤佳三作曲の町民歌「矢島のうた」は、大正九年に矢島小学校校歌並びに町民歌として制定されて以来、昭和二二年の学制改革まで、小学校校歌として歌われ、その後空白をおき町民歌として町民に親しまれてきた。

皇太子殿下・皇太子妃殿下、矢島町を行啓

(昭和59年9月号より・19年前)



『皇太子殿下・皇太子妃殿下（現天皇、皇后両陛下）が八月二日当町を行啓になりました。』

ご滞在最終日、八月二日は快晴に恵まれ、両殿下がご休息になる花立高原は、さわやかな風が流れ、鳥海山もくつきりと姿を見せ両殿下をお待ちする絶好の行啓日和となりました。花立山荘前広場には午前

十一時四十五分にお着きになり町民約一五〇〇人が日の丸の小旗を振って奉迎致しました。

花立山荘前広場では、小学校緑の少年団が行啓を記念してアカマツを植樹しているところをご視察、児童たちに優しくお声をかけられ、ご激励くださいました。ご昼食は、アユ、ヤマメ、山菜など鳥海山麓でとれたものを、ご賞味され、午後一時五十分「町民の皆様によく」とのお言葉を残しお発になりました。』

鳥海高原スキー場オープン!

(昭和60年1月号より)



『町民待望の鳥海高原矢島スキー場が完成し、竣工式が行われました。』

式は午前十一時から茂木町長、大井議長、県関係者、周辺市町をはじめ工事関係者ら来賓多数の出席のもとに安全祈願祭が行われた後、茂木町長らがテープカットを行い、地元スキークラブ会員と湯沢北高スキー部員が「祝鳥海高原矢島スキー場」と書かれたプラカードと赤と黄色の発煙筒を手に滑走しオープンを祝いました。この日の積雪は四十七センチで、ゲレンデでは、約五百人のスキーヤーが初滑りを楽しみました。』

「矢島町」誕生二〇〇年を迎える

(昭和63年6月号より)

『立町一〇〇年の記念式典が4月28日、日新館に町内外の関係者四百人が出席して行われました。』

式典では、長年にわたって書道の指導を行ってきた後藤竹清氏と町民憲章起草委員七人、町の花・鳥の入選者七人に感謝状を贈ったあと、茂木町長、大井議会議長のあいさつ、来賓皆様から祝辞のあと、日新館地内に町の花「やまざくら」の記念植樹を行い記念すべき年を祝うとともに、今後の発展を誓いました。』

● 第1回矢島町・鳥海高原サイクルードレース

(昭和62年9月号より)

『八月二日、第一回矢島町・鳥海高原サイクルードレース大会が行われました。』

大会には、全国十三都道府県から一九二名のアマチュア選手が参加、A・B・Cの三クラスに分かれて、さわやかな夏の鳥海高原を舞台に熱い戦いを展開致しました。

七月二十八日から八月六日までは関西、新潟から十二大学、三十七名の自転車競技部の合宿が行われるなど町は銀輪一色になりました。

大会は、町の中心街を沿道の住民の声援に送られパレードした後長泥をクラスA・B(三十キロ)一二三名が九時十分は茂木町長のピストルの合図で一斉にスタート、五分後にはクラスC(十七キロ)六十九名がスタート、選手たちは矢島一号線を快調に走り、沢内から連続の登り坂、そして、緑一色の草地の中を走り、クラスCは花立クリーンハイツ前に次々にゴール、クラスA・Bは善神のゴールを目指し走り続けました。



現在では800人を集める全国に誇るイベントに成長

『このような町の中心部の一般公道を使用した本格的なロードレース大会は、県内でも矢島町が初めてとあって、開催前から県内外の大きな反響を呼び、当日は沿道やスタート、ゴール地点には多数の住民や観光客が応援に駆けつけました。』

● 長野県佐久市・歴史が縁で友好都市に



(昭和63年8月号より)

『佐久市と矢島町の友好都市盟約書の締結式が七月十一日、長野県佐久市役所で行われました。』

締結式には、本町から茂木町長、大井議会議長らが出席しました。式では、神津佐久市長、桜井佐久市議会議長、茂木町長、大井議会議長が盟約書の調印を行い、交換し合いました。

佐久市との交流は昭和五十三年五月に、佐久市の郷土史家らが本町との歴史的つながりの研究のため本町を訪れたのがきっかけとなり、両市町の交流が始まり、以後議員、役場職員、郷土史研究家らが相互に訪問して交流を深めてきましたが、今年四月、立町百年記念式典に佐久市長らが来町し友好都市締結の合意をしてその運びとなりました。』

● 町のシンボル完成!!



すっかり町のシンボルとして定着

『立町一〇〇年を記念して建設整備されておりました「記念塔」が完成しました。
記念塔はブロンズで作られ、一五・五メートルの高さで東北最大規模の塔です。この塔は、「矢島」の矢を表徴したデザインで、矢島の町が栄えゆく形態を子吉川の流れと共に大いなる日本海を目指す雄大な構想の彫刻です。この作品は、二紀会会員で彫刻家の渡辺昭次氏のデザインです。』

(平成元年9月号より)

● 1億円の使い道を考える！
ふるさと創生検討委員会設置

(平成元年6月号より・16年前)

『自ら考え自ら行う地域づくり』事業として地方が知恵を出し、自主的・主体的な地域づくりを行う「ふるさと創生」で国より一億円が交付されます。
町では町民からアイデアを募集したところ中学生、一般から百五十七件のアイデアをいただきました。
現在、町では町民各層三十五名からなる「ふるさと創生検討委員会」を設置し検討していただいております。会合を重ね応募されたアイデアを含め、個性ある町づくりを目指した「ふるさと創生事業」の答申をいただき、これをもとに議会と協議し決定することにしております。』



矢島の時代を築くリーダーが集結

● 時代のリーダーとなれ！
「日新塾」開塾

(平成2年7月号より)

『6月19日ふるさと創生事業の一環として「日新塾」が石川嘉明塾長(元秋田魁論説員)のもと開塾されました。』

脅威！台風19号



当時の広報の表紙



倒壊の様が台風の強さを物語ります



電柱が根元から折れ…

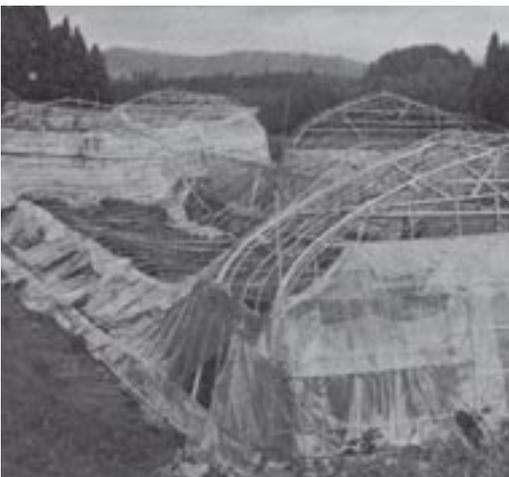


多くの家庭で停電に！

『9月28日未明、秋田県全域を暴風域に巻き込んだ台風19号。台風の規模としては、昭和29年の「洞爺丸台風」並みといわれ、矢島町においても、家屋や建造物の損壊をはじめ、収穫期を迎えた農作物は大打撃を受けるなど各地に大きなツメ跡を残しました。この時の被害は今なお町民の記憶に深く刻まれています。』

(平成3年10月増刊号より)

● 自然の脅威！ 嵐19号上陸の爪痕



土田家も屋根に被害を受けた

元オリンピック選手・山田敬蔵さん
花立牧場公園を走る

(平成6年11月号より)

『第11回鳥海高原花立マラソン大会にオリンピック選手(昭和二十七年第十五回ヘルシンキ大会)の山田敬蔵さんを招待し、マラソン大会が開催されました。当日は好天に恵まれ三百五十名が日頃鍛えた“自慢”の健脚を競いました。山田さんはスタート時間をずらした2kmにすべて出場し(6回)最後に8kmにも出場し参加者はもちろん役員も驚かされました。』

クスキをつなぎ熱いドラマを展開

第1回鳥海高原駅伝競走大会

(平成7年10月号より)

『鳥海山祓川までの山岳道路を舞台に、第1回鳥海高原駅伝競走大会が9月3日に開催されました。この大会は町の活性化PRや中長距離ランナーの育成などを目的に行われたものです。』

大会は日新館から祓川までの往復する五十キロコースを一部A(一般・大学男子・五区間)に9チーム、同じくB(一般・高校男子・六区間)に十三チームの二十チームが出場しました。又、日新館から森林組合までを往復し、4人で十キロを走る二部に十三チームが出場しました。当日は雨が降ったり止んだりのあいにくの天候でしたが、沿道の多くの応援者の声援を受けながら選手は力走しました。』



箱根駅伝を走る
チームも出場

地域の足として一〇年
鳥海山ろく線開業一〇周年記念式典

(平成7年11月号より)

『十月一日、由利高原鉄道鳥海山ろく線が開業して十周年の節目を迎え、日新館において記念式典を関係者約百七十名の出席をえて行われました。』

鳥海山ろく線は、昭和六十年十月に国鉄矢島線から秋田県及び治線の自治体等の出資を受け第三セクターとして開業し、今年で十周年を迎えました。

式典では主催者を代表して本荘市長が「十年を一つの区切りとし、マイルール意識を向上させながら一層の利用促進に努めていきたい」とあいさつをしました。また、駅の美化に努めていただいた四人に感謝状、開業以来今日まで勤めていただいた五人に表彰状が贈呈されました。

又、記念行事の一環として開業以来ポスターなどのモデルになっていた、だいた三浦美咲ちゃん(小板戸)(昭和六十年十月十日生まれで沿線市町で開業時に一番近い生年月日)に一日駅長となっていただき開業をお祝いしました。』

元プロ野球選手の野球教室

(平成8年9月号より)

『八月十日、多目的運動広場を会場に元プロ野球選手を講師に迎え、矢島小・中学生を含む百九十名の野球少年が参加し、少年野球教室が開催されました。講師には遠藤一彦氏(元大洋、投手部門)、田野倉利男(元ロッテ、打撃同)、水上善雄(元ダイエー、守備走塁同)、武藤一邦(元ロッテ、打撃外野守備同)の四氏で、子供達は緊張しながらも真剣なまなざしで実技指導を受けていました。』



「ジャージー牛乳の発泡酒「ミルシュ」誕生

(平成8年1月号より)

『ジャージー牛乳発泡酒の試作品が完成し、十二月十四日命名発表並びに試飲会が行われました。』

これは、平成二年から秋田県醸造試験場、天寿酒造(株)の協力を得て開発を進めて来たもので、この度試作品が完成したものです。乳から酒を造るといふのは世界的に見てもあまり例がなく、大変珍しく貴重な物のようです。

この「ミルシュ」は淡い緑黄色でヨーグルトのような香りでアルコールは7%未満。そしてジャージー牛乳の特性を生かした栄養分(タンパク質、ミネラル、ビタミンB2)が豊富で、爽やかなお酒になっています。参加者は「味わったことがない味だが大変おいしい」と好評でした。』



矢島町助役に吉川浩民氏

(平成10年10月号より)

『4月より空席となっておりました矢島町助役に、吉川浩民氏(千葉県習志野市)が選任され、10月1日より着任となりました。』

地方自治体に、地方分権にかかる独創性や健全財政が求められるなか、矢島町の将来を見据えて、町長が自治省に打診したところ、今回の人事が実現したものです。

吉川新助役は、昭和39年新潟県生まれ。東京大学法学部を卒業後自治省入省。石川県財政課長、総務庁人事局参事官補佐を歴任。

奥さんと子供2人(小学校1年、3歳)の4人家族。休日は家族とドライブ、酒はたしなむ程度とのこと。』



百年の歴史が築き上げた独立独歩の町サミット

(平成9年11月号より)

『第一回目は、岐阜県兼山町で昭和六十三年に開催されました。明治二十二年の町制施行以来、分離も合併もせず百年の間、純血自治を守りつづけた全国十三の町が一堂に会し、それぞれ町が歴史や産業そして将来について語り合うものです。』

第十回目を迎えたこのサミットは、十月二十四日矢島町日新館で開催されました。全国南は熊本県宮原町から北は秋田県矢島町の八県十三町が集まった中で、町長が「地方分権が進められ、町村の合併も要請されつつありますが、効率性だけを求めて住民一人ひとりが生きがいを感じる自治行政が確立できるでしょうか。ここに集まった十三町は互助共栄の元に、相互の連携を強固にして産業、文化、人的交流を深めてまいりたい」と歓迎のあいさつ。続く各町の発表では、静岡県由比町の青木町長が「国や県をあてにしている良い町はできない。そこに住む人々が自ら頑張らなければならない」と農業問題を例にあげながら力説。など参加各町が地元との問題や悩み、地の利を生かした町づくりについて発表しました。何れ劣らぬ論客揃いであり、発表時間5分では短か過ぎたようでしたが、各町長の話のまとめ方やユーモアを混えた内容には、参加した百五十名の町民の方々も満足したようでした。

この後第十回のサミットを記念して、「各町の特産品の販売促進や歴史・文化を通して住民交流を深める。」などを盛り込んだ共同宣言を発表。各町の特産品抽選会、記念植樹が行われました。』

◎参加十三町紹介(南から)

- ・熊本県 宮原町
- ・兵庫県 生野町
- ・岐阜県 兼山町
- ・静岡県 新居町
- ・静岡県 舞阪町
- ・静岡県 由比町
- ・静岡県 蒲原町
- ・千葉県 酒々井町
- ・群馬県 藪塚町
- ・群馬県 長野原町
- ・群馬県 伊香保町
- ・宮城県 登米町
- ・秋田県 矢島町

● 高松市との友好都市協定に調印！

(平成11年10月27日・523号より)

『約400年前、戦国時代から江戸時代にかけて登場した生駒公の統治下にあった香川県高松市と矢島町。両者の歴史的なつながりを再認識し、お互いの交流を深めようとの気運が市民、町民の中から盛り上がり、教育文化、産業経済、観光等の交流を促進し、ともに繁栄することを年頭に、市町部局をはじめ市町議会の全面的なご支援をいただき、今回の友好都市協定の運びとなりました。この日は同時に町制施行110周年の記念式典もあわせて行われました。』



調印を行う左・増田高松市長と右・佐藤矢島町長
(この時あわせて高松市「歴史民俗協会」と矢島町「郷土歴史研究会」の姉妹縁組協定も結ばれた。)

● こんな問題もありました・・・ 「コンピュータ2000年問題」

(平成11年12月・524号より)

『1999年の次の年に起こるといわれた「2000年問題」が心配されました。コンピュータが誤作動を起こすといわれ、生活全般に大きな問題でる可能性が心配されました。』
役場においても「コンピュータ西暦2000年相談窓口」を開設し、また当日には担当職員が役場に在庁するなどして対策に追われましたが、大きな混乱も無く無事「2000年問題」をクリアしました。

● 情報ネットワークシステム完成！

(平成12年4月・528号より)

『現在ではybnネットが敷設され、高速インターネットが矢島でも利用できるようになりましたが、情報の町矢島のさきがけとなった事業が「矢島町情報ネットワークシステム」です。インターネットとテレビ電話を使い、行政、教育、福祉、防災等の分野で素早い双方向の行政情報提供目指して完成しました。』

この時からインターネットで公共施設の予約が出来るようになりました。



矢島町消防団6分団12部制に統合

(平成13年5月・541号より)

『町の安全を守る消防団ですが、若手の減少による団員不足、団員のサラリーマン化による、有事の際の出動団員の確保が困難になるなど深刻する問題を解決するため、平成10年10月から関係各機関で協議を重ねられて来ましたが、この年に6分団12部制を含む改革の内容が矢島町消防団再編大綱(案)として提出、平成13年4月1日から施行されることとなりました。』



4月1日、新分団への辞令交付式の様子

町制施行115周年記念式典

(平成16年12月・

584号より)

『合併の調印も終わり、矢島町が単独の町制を行うのもあと僅かとなった11月15日に「町制施行115周年記念式典」が行われました。合併を目前に佐藤清圓矢島町長は「先人先輩の偉業を受け継ぎながら、我が町の歴史と伝統が更に輝きを増すものと深く肝に銘ずるものであります」と挨拶しました。』



関係各位250名が参加した式典の様子

県内トップを切り IT講習始まる

(平成13年2月・538号より)

『国が現在進めているIT施策で「IT基礎技能講習会」が県内トップを切って行われました。当日(1月22日)は女性を対象に募集しましたが、満員となる程の盛況ぶりでした。』

講習では多くの人が日頃からパソコンに触れているようでスムーズな入力できていました。』

矢島からの救急車 モンゴリ疾走!

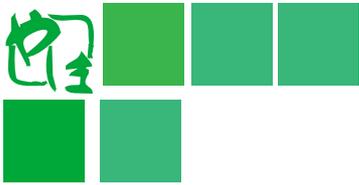
(平成16年2月・574号より)

『消防署にて使っていた救急車をモンゴルに送りました。輸送料は町の方々の寄付で賄いマンダラ・オウオ郡の病院で活躍中です。』



施設竣工年表(日1115日17)

平成11年	6月13日	「やさい王国」オープン
平成12年	2月	「矢島保育園」完成
	"	特別養護老人ホーム
	"	「ふるさと矢島」完成
	4月	「情報ネットワークシステム」完成
平成13年	4月20日	「ミルジー」営業開始
	" 16日	「矢島町歴史交流館・道益苑」完成
平成14年	6月	「榎木田地区分譲地」分譲開始。
	4月	高速インターネットサービス「ybネット」運用開始。
平成16年	10月	「中学校グラウンド改修工事完了」(19年国体に向けて)



矢島のうた

土田誠一 作詞
斎藤佳三 作曲

1. 春来たれば 四方の山辺
土も薫る 万草の花
その精こそ 矢島の魂
永久に新たに かおりを増す
2. 夏真っ白き 鳥海山
清くたけき 姿こそは
我が歴史の 鑑なれや
たゆまず磨け その勲を
3. 秋は紅葉 八汐の山
錦かざり 帰る子等は
学び終えし 我がはらから
綾錦より 濃きは誠
4. 冬になれば 山あろし
鉄も凍る 子吉川の
その氷より なお堅きは
矢島健児の 心なるぞ

(五合目・碓川より望む鳥海山山頂)

矢島町町章



矢島町の「や」を図案化したので、中心部の三角形は矢島を代表する樹木、杉を代表し、この二つの組合せで融和とのびゆく郷土矢島を表現しております。(昭和43年11月制定)

由利本荘市市章



1市7町の合併に因み、由利本荘市の「由」と「本」の字体を合体し、「由」とも「本」とも取れるデザインを全体のモチーフとしています。ユリの花、ユリ根、ごてんまりをベースとして「人と自然が共生する躍動と創造の都市(まち)」を意識して躍動感のある造形といたしました。

町の花 やまざくら



(昭和63年4月1日制定)

町の鳥 やまばと



(昭和63年4月1日制定)

町の木 鳥海ムラスギ



(昭和42年スギ制定後に昭和63年4月1日ムラスギに制定)